

自分を知ることから
生まれるパワー

どこに行くのでも、誠心誠意行きなさい。

— 孔子

もう何年か前になるが、アメリカの作家で科学者のマイケル・ハートが、『歴史を創った一〇〇人』（開発社刊）という本を執筆し、世界にもっとも大きな影響を及ぼした人物トップ一〇〇を選び、略歴とともに紹介した。

この本は大いに物議を醸した。主な争点は、誰がランク入りしていて誰がしていないかであり、またその順位である。ハートはモハメッドをランキング一位にあげ、アイザック・ニュートン、イエス・キリスト、そして仏陀が続いた。アメリカ人はトップテンには誰も入っておらず、もっとも順位が高かったジョージ・ワシントンでさえ二六位、ほとんどのアメリカ人が名前すら聞いたことのないような人々の後にランクされていた。ベンジャミン・フランクリンとエイブラハム・リンカーンはランクインすら果たせず、特筆すべき人物として名前があがるにとどまった。

ハートによるトップ一〇〇の選定は万人に受け入れられるものではなかったが、彼は序文で気迫あふれる、理路整然とした説明を行っている。ハートによれば、このランキングは影響を与えた人々の数と、その時代を超えた影響の広がり方に基づいて決めたという。彼の指摘によれば、モハメッドの影響とその教えは、またたく間に西アフリカからインドネシアの島々までの世界の非常に広い範囲に広まり、そこで接触した文化を劇的に変えた。モハメッドのこうした強大な宗教的・非宗教的影響力は一三世紀以上にわたって持続し、今なお色濃く残っているのだ。

同様に、ハートは、現代科学の父であるニュートンが、今日の人々の生活にとつてもなく大きな影響を与えたと記す。ニュートンが起こした科学革命は、政治、経済、通信、交通、農業、医学など、ほぼすべての

面で生活を根底から変えた。ニュートンの発見が発端となって得られた科学的知識と技術がなかったとしたら、今、私たちの世界は全く違うものになっていただろう。

ハートはまた、イエス・キリストが、特にヨーロッパ文明の発展とその後のアメリカ大陸にまで与えた劇的な影響について指摘している。その一方で、仏陀はインドと東アジアの多様な文化に大きな影響を及ぼした。トップ四にランクインした人物たちは死してなお影響を与え続けたというだけでなく、その影響力は飛躍的に増していったのである。

この本に惹きこまれてしまうのは、こうした歴史的な人物たちに対する著者のランクづけの仕方のせいばかりではなく、彼らがどんな人物だったか、彼らが行った活動はどのようなものだったかについて、手際よくまとめられているからだ。私は、誰がもっとも重要だったかとか、影響力を持っていたかという論争に加わるつもりはない。しかし、こうした人々の大部分が必ずと言っていいほど非常に強いアイデンティティを持っていたことには、大いに考えさせられた。自分が何ものであるかを知っていることは、もっとも大切なことを人生で達成するための力を彼らに与えたのだ。

第一章で、私たちはヒーローについて考えてみよう。ヒーローとは、自分にもっとも大きな影響を与えた人々、一番よいところを引き出してくれる人々、そしてよりよい自分になれるよう励ましてくれる人々のことだ。こうした人々が持っている、内面から生まれるパワーがどこから来るのか、彼らに共通した特徴をいくつか取り上げて検討し、どんな教訓が得られるかを考えよう。

だが一方で、ヒーローがやっかいなのは、私たちをひるませ、こんな考えを抱かせてしまいかねないこと

ろだ。「自分には彼らみたいなことはできやしない。あんなふうにはうまくはできないよ」こうした考えは、私たちが今生きている時代を反映してもいる。第二章では、現代という大渋滞の時代での生活を検証する。そこで私たちがいつも自分の望みや期待通りに生きられるわけではない理由をいくつか探っていこう。せわしない現代の生活を乗り切る能力、自分たちにとって真に重要なことに取り組む能力について流布されている神話のいくつかに異議を唱えよう。

そして第三章では、この本の中心テーマに移っていく。いつか自分の夢を達成し、人生において真の充足感を見つけたいという欲求について語ることにしよう。

しかし、ちょっと先を急ぎすぎたようだ。さあ、今から私たちのヒーローについて考えよう。

ヒーロー 自分が何ものかわかっている人たち

強い精神の持ち主が、かたく決意すれば、どんな運命のいたずらにも左右されない。

——エラ・ホイラー・ウイルコックス

現代はヒーロー不在の時代と言われている。私はけっしてそう思わない。私は、どうやったらその人が秘めている価値を発見し、それに従って生きていけるかをテーマに講義し、人々と語り合っているが、その間にヒーローの話は何度も聞かされてきた。有名な人にとっても無名人にとっても、ヒーローが生き方の手本や精神的な励みになっているのだ。

人生におけるヒーローをあげてくださいと言われれば、誰でも、私生活や仕事に影響を与えてくれた、尊敬する人物の姿を思い浮かべることができる。そんなヒーローが私にもたくさんいる。私はその人たちの心を敬愛している。私の一番良いところを引き出し、本当の自分を見つづけるきっかけを与えてくれたのは、こうしたヒーローたちだった。

1 ウィンストン・チャーチルとイギリスの暗黒時代

なぜ、ヒーローの話なのか——その理由を説明するには、私自身の精神的な励みにもなっているウィンストン・チャーチルを例にするのがいいだろう。チャーチルが私のヒーローとなったのは高校時代だ。ある教師に出会ったのをきっかけに、私は歴史のおもしろさに目覚め、第二次世界大戦で果たしたチャーチルの役割を知ることになった（この教師もやはり、私のヒーローの一人だが、この人については後ほど説明したい）。最近わかったことだが、どうやら戦後育ちの方はチャーチルをあまりよくご存じではないらしい。ちらっと名前を聞いたことがある程度になってしまっているようだが、実際にはウィンストン・チャーチルは文明社会のもっともドラマティックな分かれ道で、決定的な役割を果たした男なのである。

まず、チャーチルが首相に就任した一九四〇年五月、イギリスは、生き延びられるかどうかの瀬戸際に立たされていたという事実から話を始めなくてはならない。イギリスと連合国がドイツを破った第一次大戦が終わり、二〇年あまりが過ぎたところだった。第一次大戦は「すべての戦争を終結させる戦争」だと誰もが思っていた。しかし、その時には、軍事を復活させたアドルフ・ヒトラーのナチス・ドイツが、オランダとベルギーを占領し、フランスに押し寄せていたのだ。第一次大戦の幕開けが、さらに破壊力を加えて再現されているかのようなようだった。今回のドイツによる電撃戦は、どう見ても止められそうになかった。

ヒトラーはそれまでの五年間、国際世論を嘲笑うようにドイツの再軍備を進め、第一次大戦後にフランスに支配権が移った旧ドイツ領を武力で制圧していた。ナチスの策略により、オーストリアも無血のうちにド

イツに併合されていた。一九三八年秋に開かれた「ミュンヘン会談」で、ヒトラーは、イギリス首相ネヴィル・チェンバレンとフランス首相エドゥアール・ダラディエを言葉巧みに丸め込んで、チェコスロバキアのドイツ語圏を併合し「保護」という主張を押し通した。だが、いったんそれを押し通すと、ヒトラーは、半年もしないうちに、会談での約束を踏みにじり、それ以外の地域まで占領してしまった。イギリスが再軍備を始めたのは、この期に及んでからにすぎず、兵力や近代的軍備ではドイツに大きな差をつけられていた。イギリスは、強力なフランス軍が、もしかしたらドイツのそれ以上の侵攻を阻んでくれるのではないかと期待することしかできなかった。

一九三九年九月、ナチス・ドイツ軍はポーランドに侵攻した。ミュンヘン会談での約束をあからさまに無視する行動だった。万一の際には、ポーランドを支援する約束を交わしていたイギリスとフランスは、しぶしぶドイツに宣戦を布告する。これは手遅れでもあり、効果にも乏しかった。ナチス・ドイツはわずか数週間でポーランドを占領してしまったからだ。

一九三九年から四〇年にかけて、ドイツ軍とフランス軍は難攻不落と言われたマジノ線の要塞をはさんでにらみ合いを続けたが、冬の明けた五月になっても、ヒトラーの勢いは止まりそうになかった。ドイツ戦車隊は北海沿岸を通り抜けると、フランス国境に広がる要塞地帯を迂回し、そのままパリに進撃する構えを見せた。

チェンバレンはヒトラーとのミュンヘン会談での合意について、声明の中で「我々の時代の平和」と表現したが、結果はまったく逆になってしまった。五月九日、面目をすっかり失ったチェンバレンは首相を辞任

し、国王のジョージ四世に後継者としてウインストン・チャーチルを推した。

チャーチルはチェンバレンと同じ保守党に属していたが、チェンバレンらの対独政策を批判するグループの代表格だった。チェンバレンが主張する「我々の時代の平和」というドイツへの宥和策を「どうしようもない大失敗」と決めつけていた。そのチェンバレンが、もはや弱気になり、チャーチルに「私の失敗だった。うまくやれるかどうか試してもらえないだろうか」と語りかけているようなものだった。五月一日、ウインストン・チャーチルはバッキンガム宮殿に呼び出された。そのときのことを彼はこう振り返っている。

「先ほど、宮殿に六時に来るようにとの連絡が届いた。(略) 私は、ただちに国王の許に通された。陛下は、きわめて丁寧私を迎え、座るように言われた。陛下はしばらく、探るような、またからかうような表情で私を見つめてから、こう言われた。(略) 『組閣をお願いしたい』私は、『かしこまりました』と答えた」

首相に就任したチャーチルはさっそく、政界や軍の指導者、顧問などいろいろな人物と話し合い、彼らから協力をとりつけて連立内閣をスタートさせた。ヨーロッパ大陸では相変わらず砲声が響いていた。

こうした風雲急を告げる時代に、チャーチルの立場におかれたとしたら、その人は祖国に迫ろうとしている脅威におびえるのではないだろうか。難しい局面で国の舵取りを委ねられたことを重荷に感じるのではないだろうか。切り抜ける力が、はたして自分にあるだろうか、と。しかし、チャーチルはおびえたりはしなかった。回想録によると、

午前三時にベッドに入ると、私は深い安堵感を覚えた。ようやく、あらゆる局面に対して命令を発する権限を手にしたのだ。神の意志とともに歩んでいるかのような気持ち覚え、これまでの人生はすべて、この機会、この試練のための準備にすぎなかったのだと感じた。(略) 私がこれまでの六年間に発してきた警告はおびただしい数にのぼる。内容は詳細を尽くしている上に、現在、すさまじいほどの中しているのだから、私に反対できる者は誰もいない。戦争を始めたことも、開戦の準備が不足していることも、私に端を発したことではない。私は戦争をよく知っていたし、失敗するはずがないという自信もあった。だから、夜明けが待ち遠しいとは思いながらも、私はぐっすり眠った。元気づけてくれる夢を見る必要もなかった。事実は夢にまさるのだ。

これを読んでいる私は、胸が高鳴るのを感じた。チャーチルはまさに、この時代の、この地位のためにいたような人物であり、結果として多大な変化を全世界に与えてしまったのだ。この変化のおかげで、チャーチルは文句なしに二〇世紀のうちでもっとも影響力を持つ人物の一人に数えられるようになったのである。

一九四〇年五月一日午前三時すぎ、首相になって初めての朝を迎えようとしていたときのウィンストン・チャーチルは、間違いなく「自分を取り巻く状況をコントロールできる」人物だったといつてよい。彼は自分が何ものなのかを知っていたし、危機に直面した時、自分に何ができるのかもわかっていた。チャーチルの言葉が、こうしたせば詰まった状況に立たされた男をどう描いているのか、検討してみることにしよう。

国王から新しく内閣を編成するよう求められた彼は、混乱と絶望の最中、組閣のために深夜まで働いた。

そしてベッドに入る頃、ようやく「深い安堵感を覚えた」という。

安堵感？ 彼は、史上空前の強大な軍事国家を相手に、ろくな準備もないまま戦争に巻き込まれようとしているイギリスの舵取り役をまかせられたところではないか。たった今、人生最大の任務を負わされたばかりなのに、彼は「安堵感」を味わっていた。落ち着きと安らぎを感じていたというのだ。こうした状況におかれながら、なぜ、そんなに楽観的な気分であられたのだろうか？

その疑問には、チャーチル自身が答えている。「ようやく、あらゆる局面に対して命令を発する権限を手にしたのだ。神の意志とともに歩んでいるかのような気持ちを感じた」あなたは自分の私生活のあらゆる局面に対して命令を発する権限を握っていると感じたことがあるだろうか？ あるいは神の意志とともに歩んでいると感じたことがあるだろうか？ ウィンストン・チャーチルは感じたのだ。たしかに彼の言葉には静かな自信と自尊心があふれている。チャーチルは自分の能力に自信を持っていた。自分がリーダーシップをとれば、国民がこの危機を切り抜ける道を見つけ出せるはずだ。

あなたは「それは結構だけど、私はウィンストン・チャーチルではないよ」とお考えのことだろう。それでも、誰もが自分自身の影響力の範囲内であれば、同じような自信と自尊心を持つことができる、私は信じている。チャーチルのような重大局面に直面するわけではないにせよ、人生でどんな難題に出会っても、私たちはみな、彼と同じような落ち着きや自信を抱いて、取り組むことができるはずだ、と。

では、どうすれば、それができるのだろうか。自分の人生をコントロールし、何が自分にとってもっとも大切かを見きわめ、自分がどこへ行くかとしているか、どうやってたらそこへたどりつけるのかをきちんと理

解できるような方針と計画を選ぶ——そう決意すれば、あなたは、祖国の暗黒時代のただ中にありながらチャーチルが覚えたような安堵感を味わうに違いない。

ウィンストン・チャーチルの言葉はさらに、彼がなぜ、そんな心境に達したかについても教えてくれる。「これまでの人生はすべて、この機会、この試練のための準備にすぎなかった」チャーチルのそれまでの政治生活は、けっして安楽なものではなかった。同じ保守党の中には、味方と同じくらい敵も多かった。しかし、政界の頂点へのぼりつめていくにつれ、彼は第二次大戦中にアメリカ軍を指揮したジョージ・C・マーシャル將軍の言葉を身につけていったようである。すなわち、どんな失敗も、それで終わりということはない。それは、来たるべきさらに大きな戦いへの準備なのだ。

ウィンストン・チャーチルは、こうして壮大な任務に挑む決意を固めたが、新しく課せられた責任について考えるうちに、別のことが頭をよぎった。「戦争を始めたことも、開戦の準備が不足していることも、私に端を発したことはない。私は戦争をよく知っていたし、失敗するはずがないという自信もあった」

チャーチルは、別に現実を目をつぶっていたわけではない。彼はこの問題について、六年前から充分に考えをめぐらし、準備を進めていたのだ。状況を分析し、ドイツの戦力をできるだけ慎重に調査していたし、窮地に追い込まれた際のイギリス国民の底力も知っていた。イギリス国民の知性や魂や感情を一つにするこゝとさえできれば、最後には勝てる。だからこそ国が壊滅するかもしれない瀬戸際にあっても、ウィンストン・チャーチルには「失敗するはずがないという自信もあった」と言えたのだ。私は彼の言葉にあふれている自信に心から敬服する。